

渡辺慶一先生を偲んで

昨年12月11日未明に突然ご逝去された元東海大学医学部教授の渡辺慶一先生を偲ぶ追悼集を、長年ご縁のあった弊社にて作成させていただきました。今回、先生のご親友で、ご葬儀(12月16日千日谷会堂)でも最初に弔辞をお読みになられた新赤坂クリニック 院長・松木康夫先生のお許しを得て、先生の弔辞を追悼集より抜粋し掲載させていただきます。

免疫組織学の分野で数多くの業績を残され、またそのお人柄で誰からも愛された渡辺慶一先生のご冥福を、この場をお借りし改めてお祈り申し上げます。



平成6年2月1日 開院記念パーティにて 左から2番目 松木先生、4番目 渡辺先生

謹んで渡辺慶一君の霊に申し上げます。

慶一君、君はいつも瞬時にあったけの情熱をぶつけて生きてきた。その君らしい最後とも云えるが、あまりにも突然の訃報に接したただ茫然とするばかりです。

君とのつきあいは、長くそして深かった。

高校時代から毎日のように御父上が集められ、君が愛したクラシック音楽を聞きにいったり、麻雀ではよく徹夜をしましたね。スキーもいつも一緒にでした。ちょうどスキーシーズンに迎える君の誕生日には、スキーのあと悪友が集まって君の誕生日を祝い、酒の飲めない君を肴に一晩中飲み明かしたのを思い出します。

医学部の予科時代には、ふた夏も続けて長野県戸隠の宿坊に2人きりで1ヶ月間こもり医学部進学勉強に明け暮れたのも、心から気が合ったからでしょう。その時、恋に破れ山に命を捨てて来た若い女性と遭遇し、必死になってオペラを歌ったり落語を聞かせたりして、生きていることの素晴らしさを教えたのも2人でした。例えば、2人は医者になる前に人の命を救っていたのですね。あとで、大変裕福な御両親に感謝され、当時見たこともないお料理を御馳走になったのも良い思い出です。

医学部卒業後、当時誰もが憧れた米国留学を夢見た2人は、君は在日米国空軍病院、私は陸軍病院と初めて別々になってインターンに励みました。その甲斐あってか当時難関中の難関といわれたフルブライト奨学金試験に揃って合格した時は、2人抱き合って喜び、まるで天下をとったような気持ちでした。

横浜港から出航し、2週間プレジデントウィルソン号にゆられサンフランシスコに到着、

共にアメリカの地を踏んだ時の感動は忘れられません。そして君は病理学の勉強にボストンへ、私は内科学の勉強にアトランタに向かいました。思えば、高校以来いつも一緒にあった心の友の2人が初めて別々の道を歩み出したわけです。

アメリカに残った君は猛烈な勉強、研究の間をぬって金髪の絶世の美女エリカさんを見つけ愛し合って結婚しました。一人息子を外国の女性にとられたような気がしてお怒りになられた御両親に、今こそ友情を示す時と必死に説得、説明しました。あの羽田空港での出会いの光景は未だに忘れられません。5mぐらい離れてにらみあったエリカさんと御母上はどちらともなく駆け寄り、抱き合って2人とも大声で泣き出したのです。その後、エリカさんは御両親から実の娘のように可愛がられました。また、一生懸命日本語を覚え、英会話教室を開いて君を助けました。児玉清さん、山岡久乃さん等、エリカさんと君の人柄に惹かれ生徒は門前市をなしました。当時、珍しいホームパーティーも何回となく開かれました。

その後、君は東海大学医学部病理学教授となり、私は開業の道を選びましたが、その時の御恩は一生忘れません。開業資金に切羽つまった私は、当時家売って等価交換したばかりの君のマンションを訪ねました。事情を話すと「判った」の一言、当時君の全財産だった虎の子の現金500万円を私の前にいとも無造作に差し出しました。心配した御両親が「いくら親友でも担保ぐらいつたら」と云うと、「松木は失敗するわけがない。また、松木に担保があったら僕のような貧乏人の

所にくるわけがない」と云いました。私は、重い札束を抱えて1月の寒空の下を泣きながら帰りました。しかし、心の中は君の熱い友情への感謝で春のように暖かかったのです。

お陰で開業は成功し、2年で返すことができ、君には開院以来ずっと顧問になっていただきました。今日の私があるのも総て君のお陰です。私は以来、毎年2月1日の開院記念日には君においでいただき、120名の職員の前でこの話を聞かせ、君はいつも照れた顔をしていました。

東海大学では、病理学教授として、学問、研究に没頭し、多くの優秀な弟子を育てました。また、数々の国際学会で輝かしい業績を発表し、沢山の世に残る論文を書きました。病理学者としての君の名は永久に賛美されることでしょう。

功成り、名遂げた君のリタイア後は、エリカさんと2人でゆっくり暮らすとばかり思っていました。しかし、学問の世界の方が君を必要とし離さなかったようです。君は新しい医学、そして今後の日本に何よりも大切な抗加齢医学の研究にのめりこんでゆきました。そして、現役教授の時以上の情熱で身を粉にして研究と組織づくりに打ち込んだのです。

くたびれたでしょう。さぞ、疲れたでしょう。エリカさんのことは出来る限りのことをしますので、どうぞ安心してゆっくりお休み下さい。君のことは一生忘れません。

心の友、渡辺慶一君、さようなら……。

平成14年12月16日

新赤坂クリニック

院長 松木康夫

*『渡辺慶一先生追悼集』をご希望の方はご連絡ください。
詳しくは裏表紙をご参照ください。